

高等学校における教育実習に関する研究（Ⅰ）

餅 川 正 雄*

目 次

はじめに

- 1 学校と教師について学ぶ
- 2 学校経営について学ぶ
- 3 学級経営について学ぶ
- 4 高等学校の教科指導を学ぶ
- 5 高等学校の生徒指導を学ぶ
- 6 高等学校の進路指導を学ぶ
- 7 実習生を受け入れる高等学校側の考え方

おわりに

はじめに

大学における教師教育カリキュラムは、一般教育と教科専門、教職専門の履修の後、教育実習（事前指導・実習・事後指導）を履修して集約していくという構想ができあがっている。教育実習は、教職課程の中核としての位置づけがされているのである。学生は、教職や教科の専門知識を統合化し、学問的・人間的な課題を追求する能力と態度を伸長する契機としている。

教育実習を受け入れる実習校の側から言えば、教育実習は教師になるための予行演習的な性格であり、学力が不十分で指導力の未熟な大学生が教えることは、生徒に迷惑であるという考え方がある⁽¹⁾。そのため、卒業生以外の教育実習の引き受けを拒否する学校もあり、実習先の確保は一般的に考えられるよりも極めて困難である。大学の教職課程担当者は、実習校の確保に奔走することになり、結果的に、実習校は学生の母校となることが多いのが現状である。

* 広島経済大学経済学部准教授

筆者の体験であるが、母校での教育実習は「人生の転換点」となった。30年前のことを今でも鮮明に記憶している。その実習体験は感動的であり、その後の人生の出発点になったと考えている。高等学校の教育実習期間は、2週間という短いものである。短期間に多くのことを学ぶためには、大学での事前指導が重要になってくることは言うまでもない。また、事後指導として貴重な実習体験を深く掘り下げることも大変重要な意味をもっている。

本研究（Ⅰ）では、高等学校における教育実習で何を学んで欲しいのか、何を学ぶことができるのかという問題を具体的に考察する。また、教育実習を受け入れる側の高等学校としてはどのような考え方で引き受けているのかも明らかにする。

1 学校と教師について学ぶ

1.1 教師は学校という組織の一員である

教育実習という未知への挑戦は、誰でも期待と不安が交錯するものである。教育実習の不安の一つは、授業に関するものであり、自分が黒板を背にして授業が上手くできるだろうか、という漠然としたものである。二つ目の不安は、教師の立場で生徒集団に上手く対処できるだろうか、という生徒指導に関するものである。三つ目の不安は、生徒理解に関するものであり、生徒と上手くやっていけるかどうか、というものである⁽²⁾。

教育実習の意義は、教師としての自己の職務を遂行できる最低限の教育実践の経験をすることだけではない。もう一つの意義は、大学で学んだ知識や技能を実際⁽³⁾の教育活動の中で検証し、教育の実践的、技術的な特質を研究することにある。教育実習の最も大きな喜びは、生徒との心の交流によって信頼関係が成立したと思えた時に感じるものである⁽³⁾。

教育実習生は、教師として生徒の前に立って恥ずかしくない人間を目指す必要がある⁽⁴⁾。そして、生徒に信頼され尊敬される人になって欲しい。教職を志す学生は、近い将来こんな教師になりたいという理想の姿を描いていることが多い⁽⁵⁾。教育実習で出会う先生の中に、必ず理想に近い教師がいる。多くの教師の中から自分の目標とすべき人物を探し出すことができるはずである。言うまでもなく、学校は生徒にとっても教師にとっても楽しい場所であって欲しい。また、一日の大半を過ごす訳であるから、学校での様々な経験が価値あるものであり、成長を実感できるものでなくてはならない。

教育実習生は、生徒の時には観ることができなかった教師の姿を、教育実習中に観ることになる。例えば、教師同士が生徒の指導について話し合っている場面や、

準備室で校務分掌の仕事をしている真剣な姿を観ることができる。生徒であった時は、教師の授業中の姿や清掃時間の姿、クラブ指導の姿を観ていただけであり、それ以外の時間の教師の様子を観ることは極めて少ない。学校も一つの組織であり、その組織が機能的に動くためには、それぞれの教師が自分の役割を積極的に果たしながら、互いに協力することが必要である。従って教師も学校という組織の一員であるという認識をもつことが重要である。教育実習では組織として学校を観るという意識をもって臨んで欲しい。なぜならば、学校の教育力は教員集団の組織としての力でもあるからである。

1.2 学校の危機管理とはどのようなものかを知る

学校の危機管理とは、「生徒のあらゆる変化への対応」である。

危機とは、「突発的に起きたら困るもの」であり、例えば、いじめ、万引き、校内暴力、学級崩壊、登校拒否、自殺、少年犯罪など生徒の問題行動を危機として捉えるだけでなく、無気力、孤立なども心理的な危機だと言える、管理とは、これらの事態に対する的確な判断と迅速な措置を意味している。危機管理は、未然防止が第一であることは言うまでもない。⁽⁶⁾危機管理の大原則は、常に最悪に備えることだと言われている。できる限り危機を回避できるように指導していくことが重要なのである。

例えば、外部から自転車で通学する「生徒の交通マナーが悪い」というお叱りの電話がかかってくることもある。実際に現地へ行ってみると、信号無視や道路の反対側を走る逆走などがある。早速、登校時間に教師に交差点で登校指導をしてもらうことにする。また、全校集会を開いて自転車の交通ルールを守るよう注意を喚起する。命にかかわる事であり、教師は生徒に対して、「危険を予知する力」、「危険を回避する方法」、「万が一、事故を起こした時の対応」などを繰り返し、指導していくことになる。被害者にならないだけでなく、加害者にもならないよう指導しなければならない。小学生・中学生・高校生に対する痴漢行為などの不審者情報が入った時に、目の前の生徒にどのように指導するのかを考えておく必要がある。実習生は、生徒の安心と安全を守るという観点から、自分が担任だったらどのような話を生徒にするのかをシミュレーションしておくべきである。その際の指導はタイミングとスピードが最も重要な要素である。学校は生徒の安全と安心を守る所ではないのである。

1.3 外部の視点で客観的に高等学校を観る

教育実習生は、実習校の一員として生活する訳であるが、外部の視点ももっているということも忘れてはならない。例えて言うならば、「学校」を机の上に置いて、上から横から斜めから立体的に客観的に観察するということである。実際には、学校内を隅々までくまなく歩いて回って欲しい。自分の足を使って現地へ行って、自分の目で確認することである。例えば、体育館やプールの裏側に何があるのか、校舎の屋上からは何が見えるのか。ゴミ置場、トイレ、倉庫は、どのような状態か。玄関だけでなく廊下や階段、水飲み場、窓ガラスはどうだろうか。雑巾が投げ捨てられていたり、綿ゴミがまっけていたりするようなことはないか。教室の中では、黒板、机・イス、後ろの荷物置き場、ゴミ箱、傘立てなどの状態に注目する。クラスが落ち着いている場合は、それらは整理整頓ができているのが普通である。何らかの問題を抱えている場合は、どこかに現われてくると考えた方がよい。

例えば、ある教室で2つの机に落書きがあった。それも油性のフェルトペンで書かれている。これを担任教師が放置したらどうなるだろうか。クラス内での人間関係が上手くいっていない証拠である。やがて、もっとエスカレートして深刻なイジメに発展し、イジメられた生徒が不登校になり、最後には学校を辞めていくことになる。⁽⁷⁾落書きをした生徒を探し出し、消させるだけでは済まないケースである。イジメが原因で自殺するという最悪の事態も想定しなければならない。教師には、学校が「すべての生徒にとって安全で安心な場所」として機能するように維持・管理する義務がある。換言すれば、生徒の生命・心身の健康を守る義務があるということである。学校を学ぶ際に、注目して欲しいことは、清掃時間の様子である。生徒はどのような動きをするのか、教師の動きはどうかを観て欲しい。

1.4 「保護者の視点」から学校に期待されていることを考える

学校に対し何が期待されているかを考える視点として、「保護者の視点」が重要である。保護者は学校に何を求めているのかを考えてみる必要がある。保護者は我が子の「健全な成長」を願っていることは共通している。友達をたくさん作って元気で楽しい学校生活を送ってくれば、それでいいという保護者もいる。学力をつけて上級学校に進学させたいと思っている保護者も多いことだろう。

少子化の影響で、長男・長女が多くなっている。⁽⁹⁾子供は一人か二人という家庭が多くなってきている。家庭の中で兄弟・姉妹の間で学ぶことができなくなっている。保護者とすれば、どうしても自分の子供への関心が高くなり、学校に対する注文も多くなる。今も昔も、子供は親の姿をしっかりと見て育っている。世の中全体が、「自主独立」という考え方が少なくなって、他人へ依存する傾向が強くなってきてい

る。「誰かが何とかしてくれるだろう」とか「失敗したのは環境が悪かったからだ」と責任や原因を自分以外のところに求める傾向が強くなってきている。学校は親を指導することはない。一般には学校は「親を指導してはいけない」と言われている。実際に親を指導できないといった方がよいかもしれない。現実には親を指導しなければ解決しない問題もあるが、学校は親を指導する余力などないのである。教師は、生徒の指導で精一杯である。

現代は、学校に対する過度の期待がある時代である。家庭教育の範疇の問題を学校教育に求められる傾向が年々強くなってきている。親は「学校は万能ではない」ということを知りながら、学校に多くを求めているのが現状ではないだろうか。教育の基本は「親子関係」にある。親子関係が健全であれば、学校教育における教師と生徒の関係も健全である。親子関係が崩れていけば、教師と生徒の関係も危ういものになってしまう。「教師の指導を受け入れる」という大前提が崩れてしまえば、学校教育は成立しない。

2 学校経営について学ぶ

2.1 学校の「校務運営規定」を学ぶ

学校は一つの組織体である。⁽¹⁰⁾組織活動を行っている。その組織の運営においては、一つのルールが定められているのが通例である。このルールが「校務運営規定」と呼ばれるものである。誰がどのような権限と責任をもっているのかを明らかにしておく必要がある。⁽¹¹⁾言うまでもなく、学校においては校長が最高責任者であることは間違いない。しかし、何もかも校長が処理できる訳ではない。学校は教頭が動かすものであると言われている。実際に教師に対する具体的な指示・命令は教頭が行うことが多いのも事実である。⁽¹²⁾

教頭は、原則として主任に対して指示・命令を出す。そのために機能的な学校組織を考えて、教師を配置することになる。各教師（部員）は、所属する部の主任からの指示で動くことになっている。学校の管理運営という考え方に立ち、管理職である校長や教頭は、設置者の県・市教育委員会が決定している。校内の主任と呼ばれる教師は、校長が指名する方式を採用している。

（多くの場合、教育委員会に主任の任免を届け出る形になっている）

高等学校の場合、学校教育法施行規則（省令）で設置が義務付けられている主任等は次のとおりである。⁽¹³⁾

■ 教務主任、各学年主任、生徒指導主事、進路指導主事、保健主事

主任は学校の“ミドルリーダー”である。このミドルリーダーの役割が非常に重

要である。最近では「主幹」とか「副校長」といった職名も登場してきており、学校の組織運営の円滑化を図るという意味からは、歓迎すべきことである。管理職と各主任が構成メンバーになっている「校務運営会議」を週に1回開催して、学校の課題解決の取り組みを行っている。すべての教員が出席する「職員会議」は、月に1回又は2回開催していることが多い。学校の教師は、どこかの分掌に位置づいている。生徒指導部であったり進路指導部であったり、教務部であったりするのである。校内の組織をどのような形態にするのかは、校長の権限である。人員の配置についても校長の権限である。校務運営会議や職員会議の運営上の位置づけがどのようになっているかは、校長が機能的で機動力を発揮できる組織をどのように考えるかで決まってくるものである。

2.2 学校の組織はマトリックス組織であることを知る

学校の組織は、図1のように「マトリックス形態」となっている点が、企業などの組織と異なる点である。「学習（：教務）」・「生活（：生徒指導）」・「進路（：進路指導）」・「健康（：保健）」という4分野以外にも、クラブ活動や生徒会活動を指導する部（：特別活動部）を設けたり、教師の研修を企画する部（：企画研修部）を設けたりする学校もある。また、入試広報部を設けて、学校の広報活動と入試業務を担当させることもある。

2.3 高等学校の経営計画を学ぶ

高等学校では、毎年「学校経営計画」を策定している。ここでは、学校の経営目標を定め、その年度の具体的に重点目標を掲げている。具体的に何をしようとしているのかを明らかにしている。学校の「教育課程」は、狭義の「教育計画」にあたる。教育実習生はこの教育課程（カリキュラム）について学ぶ必要がある。国語を何単位、数学を何単位といういわゆるカリキュラムではなく、学力向上のために何を行うのか、人間性の育成のために何を行うのか、情報公開のために何を行うのか、

	教 務 部	生徒指導部	進路指導部	保 健 部	
1 学 年 部					
2 学 年 部					
3 学 年 部					

図1 学校の組織

というような計画についても学んで欲しい。教育実習生は、学校の経営計画を見せってもらう必要がある。そして、重点的に取り組む課題は何かを理解しておかなければならない。学校という組織の性格から、分掌を横断するような課題の解決のために、かつては、「〇〇委員会」という特別の委員会を沢山設置していることが多かった。しかし、現在は特別の委員会は必要最小限にして、できるだけ通常の分掌で対応する形態に変化してきている。これは、できるだけ無駄な会議を減らし、機動力をもって課題を解決すべきという趣旨からくるものである。また、校長の権限を制約するかのような誤解を与える委員会を設置すべきでないという考え方から、委員会の数が激減してきている。

人事委員会とか予算委員会という学校の管理運営事項にかかわる委員会の設置は、現在ではなくなっている。

2.4 学校の将来ビジョンを知る

学校では、10年後はどうなっているのか、という将来ビジョンを明らかにしているものである。これは将来を予測したものではなく、目標を達成した学校の姿を描いたものである。「期待」を含めた将来像を描くことは、学校の具体的な目標を設定する際に避けて通れないものである。是非、指導担当の教師に尋ねてみて欲しい。どのような学校を作りたいのかという理想でも構わない。その時には、実習生の考えも反対に質問されると思うので、自分の考える理想的な学校像を明確にしておく必要がある。そして、その理想を実現するための具体的な「手立て」がなくてはならない。この手立てが多くあればあるほど実現の可能性が高まるものと考えられる。

2.5 個々の教師の具体的な目標を知る

最近、個々の教師は、自分の年間重点目標を設定することになっている。授業の改善、生徒指導・クラス経営、その他（自己研修・研究）などの項目で具体的な目標を設定して取り組む「目標管理システム」が導入されてきている。その目標は単に「〇〇をする」という抽象的なものではなく、数値目標の設定が求められており、その実現ができているかどうかの中間評価、そして年度末には総括的な評価も行うこととなっている。教頭や校長が個別に面談をしている。例えば、「わかる授業」を展開するということは、教師にとって重要な目標であるが、この生徒がわかる授業を具体的にどのように判定するのかは、難しい面がある。

日々の授業について生徒に評価させる方法もあると思うが、何よりも教師は指導方法を「工夫・改善」していかなければならない。例えば、分かり易い「ワークシ

ート」を年間50枚作成するという目標を設定する教師もいる。生徒との対話を重視する教師は、毎日20人の生徒に声を掛けるという目標を設定する。現状は、どの程度かを考えて、それよりも少し上の基準（数値）を設定することが重要である。実行不可能な目標を設定することは意味がない。学級通信・学年通信を年間10号以上発行するという目標設定も可能である。これが現状から見て無理な教師であれば、年3回発行するとしても構わない。重要なことは、取り組みの目標が明確になっており、その実行が可能であるということである。次の年はさらに充実させていくという方向で進歩・発展するものにすべきである。私たちも、一年一年、これだけ成長しているということが誇りをもって示すことができるようになりたいものである。個々の教師の力が伸びなければ、学校の教育力が向上することはあり得ない。

3 学級経営について学ぶ

3.1 クラス担任の業務を体験する

教育実習において、「学級経営」について学ぶ必要がある。⁽¹⁴⁾ 具体的には、ある一つのクラスを担当して（クラス担任の教師の指導を受けながら）、朝のホームルーム（SHR）で、出席をとり生徒の健康観察を行うことからスタートする。⁽¹⁵⁾

まずは、クラスの『出席簿』をしっかりと見て欲しい。遅刻や欠席の多い生徒はいないだろうか。頻繁に保健室へ行っている生徒はいないだろうか。保護者からの欠席連絡はあっただろうか。何よりも生徒たちの中に元気のない者がいないだろうか。と個々の顔を見て欲しい。

朝のホームルーム（SHR）は短く、連絡事項は沢山あるのが普通である。朝の読書活動を行う学校が増えているので、特に学校の朝は忙しいのである。教師はバタバタしていると思うことだろう。職員朝令が終わって、クラス担任の教師は、事務室へ直行する。そこには保護者からの電話連絡の記録があるからである。自分のクラスの生徒が欠席する・遅刻するという連絡が書き込まれている。その後で、教室へ向かうのである。恐らくクラスの生徒たちは、騒がしくしていると思う。まずは着席させる必要がある。そして、出欠席の確認である。ここで話し声が聞こえるようであったら、黙らせる。しっかりと名前を呼んで出席確認と健康観察を同時に行うのである。「はい」という返事をしっかりとさせるようにしたい。最近では、高等学校でも朝の読書を行う場合も多くあるので、その指導も必要になってくる。読書中に実習生は連絡事項を板書する。または口頭で伝える。すぐに1時間目の授業が始まる。生徒はトイレに行く必要があるので、ゆとりなどはない。体育が1時間目だと着替えもする必要があるし、教室移動の場合も多くある。

重要なことは、実習生自身がテキパキとすることである。不要な言葉は遣わない。朝から小言を言うこともない。明るく元気な姿で生徒の前に立つという気持ちで、笑顔で明るい声で話しながら、生徒たちの表情を観察するのである。

3.2 リーダーの育成方法を学ぶ

教育実習においては、クラス担任の教師から、事前にその学級の様子を聞いておく必要がある。どのような経営方針でクラスを運営されているのかが知りたいのである。クラスには生徒のリーダーが存在するものである。⁽¹⁶⁾その生徒はどこに座っているのかを教えてもらうべきである。人一倍元気な生徒や孤立していて心配な生徒もいる。その生徒がどこに座っているのかも事前に確認しておく。クラス経営は、難しいものではない。それは個々の生徒の把握から始まり、集団作りという終点がある。教師の目標は望ましい集団をつくっていくということである。その指導のポイントはリーダーの育成にある。

放任主義で自然に任せてはいけいない。リーダーにしたい生徒をしっかりと捉えて、指導しなければ集団作りは失敗することが多い。クラス担任は、意識的にリーダーとの接触を多くして指導しているのである。リーダーには、担任の気持ちを代弁してくれるような生徒が望ましい。クラスがどのような状態になっているのかは、休憩時間や昼休みにそのクラスへ行ってみるとすぐに分かる。リーダーは声が大きく、多くの生徒から注目されるものである。一見すると「落ち着いている」、「教師の話をよく聞いている」、「最初に動く」、「その生徒が話すときに周囲が黙る」ということで、判断できる。リーダーは人望がある。リーダーは、自分の意見をはっきりと言うことができる。教師はリーダーに恥をかかせてはならないということを心得ておく必要がある。

3.3 学級集団づくりの難しさを学ぶ

学級集団づくりは、クラス担任の学級経営方針が最も重要なポイントになることは言うまでもない。ベテランの教師でも、学級経営がうまくいかないこともある。⁽¹⁸⁾これは、最近の子どもの生活全般が変化してきていることが原因の一つである。集団生活になじめない生徒も多く存在する。それをどのように変えていくのかが教師の力量でもある。生徒と教師の関係がギクシャクして上手くいなくなる事例もある。⁽¹⁹⁾そこで、保護者からクレームがくるということになる。生徒の気持ちを理解し、保護者の気持ちに寄り添った言動がなければ、上手くいかないのは当然のことである。「個々の生徒はいいのだから、集団になると難しくなる」というのが教師の本音で

ある。これは、それほどに“集団作り”というものが難しいということでもある。

教育実習では、クラス集団をどのように育て、動かせばいいのかを学んで欲しい。実際のクラス経営から学ぶべきである。マスコミで取り上げられるような言葉で表現すれば、授業崩壊、学級崩壊、最後には学校崩壊という事態もある。すべては「学校というところは教師の言うことを生徒は素直に聞くとこらだ」という大前提が崩れてしまったことが原因である。そして教師集団が結束して、どの教師も生徒に対して同じことを言うという原則を守れなかったことから始まる。教師集団が結束できていないことが生徒にも分かってしまい、生徒にとって都合のいい部分を強調して、教師とやりあうことが起きる。こんな時、ある教師は、生徒に対して平等でないことも指摘される。授業が下手だと言われる。「あの先生の授業は分からない」と生徒は言う。教師が言うことに一貫性がなく、ご都合主義だと非難される。生徒に納得がいくような説明ができる教師しか受け入れられない。これは教師が生徒に迎合するということとは全く違うことである。

生徒は自分たちのことを本気で心配してくれている教師は誰かを敏感に察知するのである。そこが学級集団づくりの原点である。教師が、「君たちのことが好きだよ!」「君たちのことを心配しているよ!」というメッセージをしっかりと伝え続ける必要がある。そして、「何がよくて、何がいけないか」という判断基準も担任として明確にしておかなくてはならない。担任の気分次第で、叱ったり褒めたりしてはいけないのである。教育実習では、クラス経営の名人の教師から学んでほしいのである。どこの学校にもクラス経営が上手な教師がいるものである。その教師の姿・言動から学ぶことが多くある。教師は、単に授業が上手いだけではすまないのである。生徒と仲良くなるというような単純なものではない。教師も生徒から一人の人間として評価されているということである。

現在、人間的な魅力のある教師こそが求められているのである。そんな教師が生徒は好きである。誰からも信頼されているはずである。何よりも輝いて見えるはずである。

4 高等学校の教科指導を学ぶ

4.1 高等学校の教科指導の意義と課題を知る

教育実習生には、教科指導の意義と課題を学んで欲しい⁽²⁰⁾。そもそも指導と評価は一体のものであるという考え方から、指導にあたっては評価についても事前に学んでおかなければならない。その際に、学校によっては、教育評価の方法があいまいになっている場合もあるので、十分に注意する必要がある。⁽²¹⁾

その他にも、実習生は事前に次のようなことも確認しておいて欲しい。例えば、履修と修得の区別はどのように考えるべきか。科目の単位認定はどのような考え方で行われているのか。また、誰が最終的に単位を認定することになるのか。評価と評定は、どのように区別されているのか。進級や卒業の認定、原級留置（落第）は、どのようなケースで生じるのか。実際の高等学校では、いわゆる「教務内規」と呼ばれている校内の規定が定められており、そのきまりに従って、教科・科目の評価・評定が行われている。

何事もルールを定めておかなければ、意識統一ができなくなり、個人の勝手な判断が許されることになり、結果として指導が困難になることが多い。学校においても、無駄な議論や誤解を防ぐために考えられる事例を想定して規則を定めることになる。高等学校で問題が生じるのは、生徒指導の問題も多いが、生徒の進級や卒業の判定に関する問題も多い。これは成績の評価と単位認定という問題に起因する事項である。簡単に言えば、授業欠席が多かったり、成績不振であったりする生徒について生じる問題である。生徒の一生を左右する⁽²²⁾ような問題でもある。

（卒業判定をめぐる問題がこじれて、裁判になるケースもある）

4.2 高等学校の教務内規を学ぶ

高等学校の現場では、「教務内規」を定めている。内規というのは、校内の規則であり学校長が定めるものである。勿論、法令に抵触するような内容を定めることはできない。学校長は、内規の定めがあってもそれを超えた判断を下すことができることは言うまでもない。教頭以下はこの内規に拘束されている。つまり、例外をつくることは、校長だけの権限である。学校内部の規則であるので、公表されていないことが多いが、生徒や保護者にとって、進級や卒業の決定は大きな問題である。学校側はその要点を保護者や生徒にしっかりと説明しておく責任がある。単位不認定（いわゆる「欠点」）がどのような場合に、考えられるのかということは、生徒にとっては一番関心のあるところである。教師としては、その内容を十分に理解したうえで、指導にあたる必要がある。

4.3 教務部の業務について学ぶ

高等学校には「教務部」という校務分掌（組織）があり、教務主任（教務部長）が置かれている。大きな職員室のない学校では、教務室に教頭の席があり（常駐しており）、教育課程の編成と管理、生徒の出欠席の管理から成績管理などの重要な業務を行っている。他にも、学校評価、教科書採択、時間割編成、学校行事計画など

の業務を行っている。特に進級や卒業判定の資料となる成績と出欠席の情報管理は、学校の中でも最も重要な業務である。しかし、この認識が弱いのが学校の実態であることが多い。

学校における教務部は、企業で言えば「総務部」又は「営業本部」といったセクションである。生徒の成績は、どのような仕組みで付けられるのか、評価の資料は何か、などの疑問があると思われる。定期試験だけの結果で成績を付けるということはないが、他にどのような評価資料を使っているのだろうか。⁽²⁴⁾絶対評価とか相対評価という問題もあるが、どちらで行っているのだろうか。通常、教育実習においては、成績評価や単位認定についての問題は生じない。毎日の授業の成果は、中間・期末の定期試験の成績によって評価され、最終的には年度末の「評定」によって単位の修得が認定される。学校によって教務内規の文言は、区々であるが、内規はその学校の共通的な考え方を反映しているものであるので、教師の間で議論になるような項目を網羅している。

5 高等学校の生徒指導を学ぶ

5.1 実習校の生徒指導の実態を把握する

実習生の多くは、生徒指導とは具体的にどのようなことをするのだろうか、⁽²⁵⁾と思っている。生徒指導は、問題行動に対する対処療法的な指導にとどまるものではない。生徒の健全な人格形成を図るための積極的な指導である。⁽²⁶⁾このことを前提として、教育実習生は、実習校で定められている「校則」を学んで欲しい。各学校では、学校生活に必要なルールを定めて指導を行っている。そのルールは生徒手帳にも書かれているので、見せてもらう。次に、実習校の生徒指導態勢がどのようになっているのかを学ぶことになる。学校要覧に組織図があるので、それを見させてもらう。ゆとりの時間があるときに、指導担当の教師や教頭に話を聞いてみる。生徒指導が⁽²⁷⁾どのように行われているのかをしっかりと観察したり質問したりして欲しい。

教育実習生として、実習校の生徒指導上の課題は何かを把握することが重要である。学校や生徒の“あらさがし”をするのではない。生徒の実態を正確に把握する。どの学校にも課題はある。その課題を把握し、いくつもの解決策を考え実行しているのが学校の実態である。課題が全くない学校というものは存在しないということが大前提である。最初に、解決すべき課題を見つけることが必要である。見つけたら、その課題をどうやって解決するのかを考えることになる。そのためには、しっかりと生徒を観察しなければならない。

5.2 教育実習生の生徒指導はどのようなものか

授業の中でも生徒を指導する場面がある。⁽²⁸⁾「私語」や「居眠り」などを実習生はどう指導するのか。授業中に教科書を出していない生徒、ぼんやり外を眺めている生徒がいないだろうか。授業以外の場面で、生徒指導をすることが多くある。何となく元気がない生徒がいないか、プロレスごっこでふざけたりしていないか、暴力を振るったり暴言を吐いたりする生徒はいないだろうか、喫煙が疑われるような生徒はいないか、などを担当の教師に尋ねてみて欲しい。眉を刺ったり、化粧をしたりしている生徒はいないだろうか、休み時間や放課後、清掃の時間などの生徒の言動はどうか、何よりも生徒の表情や言葉遣いはどうか、服装や髪形はどうか、生徒は明るくあいさつをしているか、教師の指導を素直に聞いているかなど、自分の目によく観察して欲しい。

実習生自身は、廊下で生徒とコミュニケーションをとってみることである。最近では先生の「指導を無視する」生徒もいる。学校ではこのような生徒をどう指導していくのかを考えておく必要がある。学校全体で組織的に生徒指導に取り組むということが最も重要なことである。中には自分は生徒指導が苦手だという教師もいる。しかし、そんな教師に生徒はついてくるだろうか。生徒に優しいだけの教師ではいけない。決められたルールを守れない生徒に対しては、学校は非常に厳しく対応する。時には、家庭と連携するために、家庭訪問をしたり保護者を召喚したりすることもある。⁽²⁹⁾特別指導と称して生徒を別室に入れて反省させることもある。

5.3 生徒指導部の業務について学ぶ

学校では、誰が生徒指導を行っているのかを学ぶ必要がある。⁽³⁰⁾生徒に対しては、入学時のオリエンテーションや集団宿泊訓練の際に管理職（校長・教頭）や生徒指導主事などが指導する。⁽³¹⁾保護者にも学校の指導方針を説明する。生徒と保護者から「誓約書」を提出してもらう。これは、学校の指導に従うという約束である。在校生に対しては、日常的にクラス担任、教科担任が行う。校務分掌の中では、「生徒指導部」を設置して学校全体の中の組織の一つとして生徒指導を行うことになっている。⁽³²⁾学校生活の規律維持や生徒の問題行動への対応が中心となっている。⁽³³⁾勿論、後追いではなく、予防的な観点から指導することも必要である。言うまでもなく、生徒指導の本来の目的は、学校生活を有意義で充実したものにするものであり、学校の安全を守り、生徒が安心して生活できる環境を整えることにある。そのために、生徒の生活環境を把握し、生徒の抱える問題や悩みを受け止め、問題を解決できるように指導・援助することに力点が置かれている。

生徒指導ができる教師は、生徒との“信頼関係”を築いている教師である。「悪いことは悪い」という毅然とした態度で生徒に接することが何よりも重要なことなのである。小さなことを見逃すことで、後で大きな事件になることも多くある。教師は“寛容な心”を持つことも大事であるが、生徒の将来のことを考えて、厳しい指導を行う場面もあるということである。教育実習生は、生徒個々の状況を把握することは難しいかもしれないが、生徒の生命にかかわるような場面では、躊躇することなく、厳しい指導を行うべきである。学校ではルールを作ることもよりも、ルールを生徒に守らせる指導が難しいのである。実際には、なぜ、このようなルールがあるのかを生徒に理解させないと、守らせることは難しいということも学んで欲しい。まずは教師自身の意識と行動が変わることである。教師が変われば生徒も必ず変わるものである。

6 高等学校の進路指導を学ぶ

6.1 実習校の進路指導の実態を把握する

教育実習で「進路指導」も学んで欲しい。教育実習生のテーマは「学校を学ぶ」ということであり、生徒指導も進路指導も学校の中核的な役割を果たすものである。そもそも高等学校は、高等普通教育及び専門教育を施すことを目的とし、社会性と個性を形成することを目標としている⁽³⁴⁾。学校は授業（教科指導）だけでは、成り立たないのである。このことは、学校のもつ社会的な使命（ミッション）を考えれば明らかになると思う。そこで、教育実習生は、実習校で行われている「進路指導の実際」を学んで欲しい。各学校では、年間指導計画を定めて指導を行っている。まずは、その年間進路指導計画を見せてもらう。次に、実習校の進路指導部がどのように組織になっているのかを学ぶことになる。学校要覧に組織図があるので、それを見て確認する。時間をつくって、進路指導担当の教師や教頭に、進路指導上の課題について話を聞いてみる必要がある。指導の重点目標も確認しておきたい。学校現場で、進路指導が実際にどのように行われているのかをしっかりと確認して欲しい⁽³⁵⁾。

更に、進路の過去の実績はどうかを数字で把握する。特に、高等学校では、就職や進学の実績も大きな意味をもっている。教育実習生として、実習校の進路指導上の課題をどのように解決しようとしているのかを把握することが重要である。例えば、進路に関する LHR だけではなく、保護者との懇談会や説明会も開催されているはずである。そこではどのような話をされるのかを尋ねてみる。進路指導を知ることとは、単に学校の出口を知るだけではない。どこの学校においても進路指導上の課題は存在する。その進路指導上の課題は「何か？」を把握し、いくつもの

解決策を考えて実行に移してしているのが学校の実態である。進路指導の場合、教科の実力つまり学力向上が図られなければならない。そして、何よりも人間教育の面も重視しなければならない。人間性を育成するための教育はどのように行われているのだろうか。生徒指導と進路指導との関係、クラブ・部活動と進路指導との関係もある。教師は、勉強と進路との関連だけを考えていたのでは困ることになる。つまり、学校教育のすべてが最終的にこの進路に関係してくるのである。

6.2 教育実習生の進路指導はどのようなものか

教育実習中に、生徒と話をしていると、進路選択の悩みを聞くこともあるかもしれない。⁽³⁶⁾その時に、実習生の経験談を話すことになると思う。実習生の中学・高校時代を思い出した時、大学生は、どんな風に見えただろうか。立派な大人に見えたはずである。「なぜ先生になろうと思ったのか?」「大学で何を学んでいるのか?」などの話をすることができると思う。さらに、実習生の中学時代、高校時代には何に力を入れていたのかを率直に話をすることもかもしれない。生徒はそのことを聞いて、自分の将来の進路を考えることになる。大前提として、様々な進路（選択肢）があることを話して欲しい。これしかないという決めつけはいけない。生徒が迷っているのは当然であるが、アドバイスをするつもりが、単なる押しつけになっている場合がある。進路を考えるときのヒントになるような話をすべきである。生徒の状況を十分に知った上でないと、安易なアドバイスはできない。保護者や担任の先生が後で困ることにならないように、しっかりと相談するように仕向けてあげることが重要である。世の中には、普段は接する機会のない様々な職業があるので、教育実習の前に、実習生自身が調べておくべきである。

6.3 進路指導部の業務について学ぶ

生徒の進路指導は、基本的には保護者が行うものである。その指導を支援するのが学校の教師である。中学校や高等学校では、誰が進路指導を行っているのだろうか。新入生に対しては、入学時のオリエンテーションや集団宿泊訓練の際に管理職（校長・教頭）や進路指導主事などが進路について話をすることがある。保護者にも進路指導について説明しなければならない。入学式や始業式、終業式といった節目に、校長や教頭から進路の講話がある。学校によっては外部講師を招いたり卒業生を招いたりすることも行われている。

最近では体験学習として、インターンシップを行うことも多くなってきた。学校教育の集大成が進路の実績として表れると言っても過言ではない。管理職の思いつ

きや個人の力量だけでは、どうにもならないのが進路指導である。教師として重要なことは、すべての保護者が子どもの進路がどうなるかを大変心配していることを忘れないようにすることである。保護者としては、学校全体の進路状況ではなく、個々の生徒の進路、つまり自分の子供の進路の問題が関心事なのである。在校生に対しては、日常的にクラス担任が進路相談・個別面談を行っている。3年生にならないと本気で進路を考えないのも事実である。しかし、それでは遅いのである。現在、学校では3年間を通して計画的な進路指導を行うようになってきている。「進路指導は個に始まって個に終わる」と言われるように、個々の生徒や保護者に対する個別指導が重要であることを忘れてはならない。他人との比較も厳禁である。その生徒のことをしっかりと考えてきめ細やかな指導を継続していく必要がある。進路指導を広く考えれば、教科指導も進路指導の中の一つとして捉えることもできる。学校の勉強が分からなくなって、最終的に生徒が「進路はどうでもいい」となってしまうのは不幸である。

校務分掌の中では、「進路指導部」を設置して学校全体の中の組織の一つとして進路指導を行うことになっている。学校では、学年主任・クラス担任と連携をとりながら、進路指導主事の教師が中心になって業務を行っている。校長や教頭も進路に関する指導には力を入れているはずである。言うまでもなく、進路指導の本来の目的は、生徒の人生を有意義で充実したものにするものであり、生徒が自分の適性を認識し、幸せな生活ができるように指導することにある。そのために、学校では、生徒の生活環境や経済環境を把握し、進路希望を明確にさせる中で、進路が実現できるように指導・援助することに重点が置かれている。進路指導ができる教師は、家庭・保護者との“信頼関係”もできている教師である。「生徒の進路希望」を把握した上で、様々な進路情報を提供しながら、生徒の相談に応ずることが何よりも重要なことなのである。教師の一言で、その生徒の一生を決定するようなことさえある。進路指導のポイントは、生徒自身に自分の進路を本気で考えさせ選択させることである。

7 実習生を受け入れる高等学校側の考え方

7.1 教員免許を取得したいだけの学生は絶対に受け入れない

7.1.1 学校の使命の一つとして教育実習を引き受けている

教育実習を受け入れる側の高等学校の教師の考え方はどうであろうか。⁽³⁷⁾大前提の一つは、すべての教師は、自分が「教育実習を体験している」ということである。もう一つの大前提は、学校が「教育実習を引き受ける義務はない」ということであ

る。実際に、教員人事などの学校内部の事情によって引き上げられないこともある。以下に示すように、学校ではそれぞれの立場で考え方が異なる。

校長は、学校の責任者として、学校の社会的な使命（ミッション）の一つと考えて教育実習を引き受ける。大学と高等学校の関係を良好なものとして維持するために引き受けるのである。教育実習を受け入れられるということは、卒業生の中に教職を目指す学生が育っているということであり、学校の誇りでもある。教育実習生のひたむきな姿に接することで、現職の教師も大いにより刺激を受けてくれると考えている。その校長が教育実習を引き受けるかどうかを最終的に決定することは当然のことである。

教頭は、本気で教師になろうとしている後輩を育てるという観点から、教育実習生を受け入れる。そして、指導者として適切な教師にその指導担当を指示することになる。卒業生だから教育実習を無条件に受け入れるというものではない。本気で指導するために、受け入れる人数には限度がある。実際に学校教育を停滞・混乱させないためにも、一定の人数制限をしていることが多い。教頭は、本気で教師になろうという意思がない学生は校長と相談して断ることになる。世間であまり知られていないことであるが、学校の対外的な窓口は“教頭”である。したがって、何事も教頭を通して話を進めなければ組織的な対応とは言えない。

担当の教師は、教頭の命令を受けて、責任感と大きな負担感をもちながらも、若い教師の卵を自分の手で立派に育てたいと思い、引き受けている。元気な実習生に刺激を受けて自分も若いころの情熱を取り戻すという教師も多い。

生徒たちは、先輩の大学生が来ることを楽しみにしている。若々しい潑刺とした姿に刺激を受けることになり、多くの生徒は、先輩である実習生を心から応援している。

実習生は、最初に電話するその学校の教頭との応対から、教育実習はスタートしているということを念頭に置いて行動すべきである。実習生は、「学校を学ぶ」という大きなテーマをもってこの教育実習に臨むことになる。勿論、各自の具体的な実習テーマも決めて臨むことになる。最も重要なことは、「実習生は本当に教師になろうとしているのか？」ということである。万一、そうでないならば、教育実習は辞退すべきである。

7.1.2 実習生が教職に就きたいという強い希望を持っていることを望んでいる

筆者の経験からも、学校現場で教育実習生を見ていると、自分自身の原点に立ち返ることができるような気がしていた。その原点とは、生徒達に対する熱い思いをもつことである。受け入れる側の教師たちも、実習生のひたむきが眩いほど美し

いと思って見ているのである。学校では毎日のようにドラマが生まれていると言われるように、生徒たちと実習生の間で何物にも代え難い感動の瞬間が繰り返され、これが教師の醍醐味だと改めて確認できることが、現場の教師にとっての教育実習の最大の意義であると言えるかもしれない。

確かに、今、学校は非常に多忙になってきている。教師の時間的・精神的なゆとりがなくなっているというのが現実である。そのような状況で、すでに述べたように学校関係者は、社会的な使命を感じて教育実習生を受け入れている。学校側は、自分たちの後輩を育成しなければならないという使命感をもっている。ただし、教員免許を取得したいだけの学生、つまり教職に就く強い希望がない学生は受け入れたくない。そのようなゆとりは学校現場にはないのである。

7.1.3 何よりも素直な心で指導を受けることを望んでいる

教育実習生は「素直な心」をもって教育実習に臨む必要がある。素直な心をもっていれば、「わからないこと」を「わかりません」「教えていただけませんか？」と質問できるはずである。先入観のない素直な心を持てば、生徒の現実の姿もはっきりと把握できるはずである。実習生は、小さな失敗を恐れる必要はないが、失敗した時や間違った時には、率直に間違いを認め、謝罪すべきことは当然のことである。不平や不満の気持も持つてはならないし、途中で投げ出すようなことがあってはならない。実習生には何よりも全力投球で臨むことが求められる⁽³⁸⁾。実習生は、生徒たちに大きな影響力をもっている教師になろうとしているはずである。実習生には、生徒の心に火をつけられるような教師を目指してほしいと思っている。生徒に迎合して表面的に生徒に好かれる教師を目指すのではなく、生徒に心から尊敬される教師を目指して欲しいと願っている。

7.1.4 学校は「〇〇大学の教育実習生」として評価している

実習校では、実習生が本気で教育実習を受けようとしているかどうかは、すぐに判断できる。メモもとらないで話を聞くだけの学生に対して本気で指導したくないというのが教師の本音である。実習生は必要事項をしっかりとメモする必要がある。実習生が話を聞く時に筆記用具をもっていないというようなことはあり得ない。担当の教師は、うなずきもせず、質問もしないような学生には何も指導したくない、と言っている。実習校では、人生の先輩である教師が実習生（大学生）を人間として評価することになる。指導する教師は、実習生の行動を観察して評価しているだけのことである⁽³⁹⁾。最終的には、「〇〇大学の教育実習生」として評価されることになる。つまり、教育実習生の評価は、大学の評価にもなってくるのである。基本的には大学の教育実習に対する取り組み姿勢や事前指導が問われるのである。

例えば、朝、学校に行き雑巾をもって職員室の机の上をふいている実習生がいた。一生懸命に廊下を掃いている実習生がいた。放課後には、空き教室で板書の練習をしている実習生の姿があった。それを見た校長や教頭は、どのように思うだろうか。そのような実習生であれば大歓迎であることは間違いない。

7.2 教育実習を成功させるために必要なことを準備しておいて欲しい

7.2.1 保護者の気持ちに寄り添った指導をするという意味を理解しているか

教師にとって大切なことは、目の前の生徒のことを愛するということである。教師として愛する生徒を心配し指導していくことが求められる。生徒のことが好きになれない人は教師には向かない。

このことは、担当する生徒の保護者の立場になって考えてみれば明らかである。教師は常に「保護者はどう思うか？」という自問自答をする必要がある。保護者としては、教師になりたいという気持ちのない学生から、未熟な授業を受けさせられたのでは困る。1時間の授業は生徒にとって一生のうちで一度しか経験できない貴重な1時間である。1時間のムダもあってよいはずはない。教える内容に間違いがあったり、誤解を与えたりするような説明も許されない。安易な気持ちで、十分な準備もしないで教壇に立つようなことがあってはならない。それだけでなく、何でも敏感に反応する多感な時期にある生徒たちを指導するのだから当然である。生徒にとっては、若い大学生に出会うことは刺激のあることに違いないし、教育実習生の姿を見て、生徒が自分も教職の道を歩みたいと決意する者も出てくるかもしれない。学校の教師は、保護者の気持ちに寄り添って生徒を指導している。教師と保護者の立場は明らかに異なるが、保護者の気持ちに寄り添った指導はできる。学校現場では、時として「生徒の目線で」とか「生徒の気持ちを理解して」というような発言も聞かれる。生徒のよいところを褒めるということや生徒の心情を受け止め、生徒との信頼関係を築くということは大事なことである。人間的な触れ合いを大事にすることも否定しない。しかし、教師はあくまで指導者である。「時には厳しく、時には優しく」生徒の行動がよくなるように具体的に指導しなければ、その使命を果たすことはできない。

7.2.2 教師として生徒の前に立つ心構えができているか

健全な親子関係が崩れつつある現代において、健全な師弟関係もあやしくな⁽⁴⁰⁾ってきている。生徒は実習生の言うことを素直に聞いてくれないかもしれない。

しかし、実習生は、教師としてその生徒の前に立っている。「○○先生」と生徒から呼ばれて、気が付くと思う。実習生は、あくまで教師としての言動が求められる。

ある実習生は「生徒とは本音で話すべきだ」と考え、自分が日頃から考えていることをそのまま話したという。しかし、その学生の発言が生徒の健全な成長に役立つものかどうか、教師として正しい発言なのかという観点からは、不適切だったという事例があった。実習生の何の教訓もない経験談や独断や偏見を押し付けるような話は、生徒にとっては、むしろ有害なことさえある。生徒と個人的に仲良くなることもいけない。学校外で会うことも許されない。メールや電話番号を生徒に教えることもいけない。生徒は年上の大学生に何らかの疑似恋愛の感情をもつ年齢でもあるので、その点は十分に注意する必要がある。教師と生徒という関係は、しっかりと、“けじめ”を付けて対応すべきである。生徒の個人的な悩みを聞いてあげるのは、よいことであるが、対応に困るような深刻な相談を受けた場合は、実習生は指導担当の教師に報告し指導を受けるべきである。他人行儀であるとかよそよそしいとか言われるかもしれないが、もともと生徒と教師の関係はそのようなものである。だからこそ教育というものが成り立っているとも言える。

7.2.3 大学で教材研究と模擬授業を体験しておいて欲しい

教育実習では、「教える」ことの難しさを痛切に感じるはずである。教えるために準備すべきことの多さにも驚くことになるだろう。教育実習の期間中には無理かもしれないが、「先生、わかったよ!」と言ってくれる生徒がいたならば、その生徒の目の輝きを一生忘れることはできないと思う。

教育実習では、時間的な限界はあるが、できるだけ多くの授業観察をさせてもらうべきである。その授業がどんな授業であっても、実習生は決して批判的な見方をしてはいけない。実習生は、その授業から何を学び自分の授業のどこで活かせるのかを考えることが重要なことである。教材研究をしていると分からないことが沢山あるはずである。それを放置しないですぐに調べる、すぐに質問することで解決していくべきである。基本的なことを質問するのは恥ずかしいと思うかもしれないが、決してそんなことはない。実は、教科書の内容であっても教えようとすると疑問点は非常に多くあるというのが、教師の思いである。基本的なことこそ、生徒に教えるのは難しいということをプロの教師はよく知っているのである。

7.2.4 学習指導案の基本的な書き方を学んでおいて欲しい

教育実習を担当した教師は、自分の授業を見せるだけでなく、実習生に指導案を書かせ、実際に授業ができるように指導しなければならない。大学での模擬授業(マイクロティーチング)と違って本物の生徒を相手に授業を行うことは容易なことではない。教材研究一つとっても、その方法は千差万別である。身近な事例を授業で話すためには、日頃から新聞や雑誌をしっかりと読んでおくことも必要である。個々

の授業の教材研究は、大学の授業では十分に捕捉できない部分でもある。学習指導案もまともに書けないのが教育実習生である。これは当然のことでもある。まともな指導案が書けるということは教師として一人前である証拠である。当然、実際に授業をやったことのない学生には無理な要求である。しかし、一から書き方を指導するほど学校は暇ではない。実習生は、指導案の書き方の基本はしっかりと身に付けたうえで実習に行かなければならない。50分の授業をどのように構想し、何を生徒に教えるのかを明確にするだけでも相当の時間を要する。

指導担当の教師は、様々な教育実践技術を教え、生徒のかかわり方を指導する必要がある。体罰やセクハラについても注意点を具体的に指導することがある。生徒の叱り方や褒め方についても、指導する。実際の生徒指導は、様々な課題を抱えた多くの生徒に対して、機動力と組織力をもって迅速かつ適切な指導を行っている。教育実習だから失敗が許されるということもある。しかし、それは、教育が継続しているものであり、間違いを修正する機会があるからである。教育実習は、何よりも“実習生の真剣さが試されている”のである。真面目に一生懸命に取り組んだ結果、何らかの間違いがあったということならば、恐らく許されると思う。しかし、いい加減な気持ちで取り組んで大きな失敗をしたならば、厳しい評価が出されることは間違いない。

おわりに

大学では、教師に向いている学生と向いていない学生がいると言われている。その向き・不向きを誰が判断するのかという問題がある。学生が自分で判断するしかないのが現実であるが、学生が職業選択を誤れば、本人だけでなく、教師としてかわる多くの生徒に大変迷惑である。判断の規準は明確ではないが、生徒の悩みを自分のことのように考えられる人でなくては教師には向かないと考えられる。教師には非常に鋭敏で繊細な感覚が要求されていることを知っていなければならない。このことを自分で確認できるのが教育実習であるとも言える。悩みのない生徒は一人もいない。教師には、生徒の多くの悩みを自分のことのように受け止め、一緒に考え解決するよう支援・援助することが求められているのである。その際に発生する「教育の起こす頭痛」とでも言うべき苦悩に耐えられる人が教師に向く人である。

教員採用試験では、学力だけでなく人間性が重視されているのも当然のことと言える。教育実践技術⁽⁴¹⁾は訓練すれば誰でも一定程度は身に付くものであるが、人間性を高めることは容易なことではない。教育実習で「学校を学ぶ」ということは「教師を学ぶ」ことでもある。教師の仕事の現実を通して学ぶということである。

教師という職業は大変きつい職業である。⁽⁴²⁾教育現場でいじめ・不登校・非行などに苦闘する先生方と話をすると、その仕事の厳しさと苦悩は「教育の起こす頭痛」と言っではあまりにも軽い表現かもしれない。教育現場のストレスが引き金となっ⁽⁴³⁾たうつ病や神経症など心を病む教師たちが急増している。

毎日、生徒と接することは楽しくないのかと言えば、そうではなく「面白い」ものであり、生き甲斐を感じて頑張れることである。私は、教師になろうと思う学生に「プロ」つまり専門家を目指して欲しいと考えている。プロになるためには、普通、10年かかると言われている。それも一生懸命に真面目に取り組んで10年のはかかるのである。プロとはコツを体得し自分の限界を知っている人のことである。自主独立の精神をもっていることは大前提であるが、自分一人でもできると思っ⁽⁴⁴⁾ているようではプロではない。学校という組織の中で自分の役割を自覚し、仲間と協同しながら使命感をもって教育ができるプロが求められているのである。

改正教育職員免許法の成立により、平成21年4月から新しく教員免許の更新制度が導入される。⁽⁴⁴⁾10年ごとに講習を受けて認定されなければならなくなった。時代の変化とともに教師に求められる資質・能力が変化することだろうが、現職教員の研修制度と更新講習制度はどのように整合性を保つのかという問題がある。⁽⁴⁵⁾更新講習の有効性を担保できるのかどうかという実質的な問題もある。

高等学校の現場で教師たちは「最近の生徒は変わった」と言い合っている。「去年は上手く指導できていたのだが、今年はどうも上手くいかない。」というベテランの教師もいる。子供たちも毎年変化してきており、現場の教師たちもどうしたらいいのか悩んでいるのである。

本研究は、「高等学校の教育実習」に焦点を当てて考察したものであるが、実際には、現職の教師にも必要な内容ではないかと考えている。それは学校経営、学級経営、教科経営を考えてみれば明らかである。多くの優れた実践から謙虚に学び、自らの実践に採り入れていく方法が最も効果的である。

今回は取り上げなかったが、教育実習の最大の課題は、「実際に授業を展開すること」である。この課題については、引き続き研究を進めていきたいと考えている。

注

- (1) 岸光城・羽原貞夫編(1996)『教育実習 教職専門シリーズ⑨』ミネルヴァ書房
- (2) 岸光城・羽原貞夫編(1996)『教育実習 教職専門シリーズ⑨』ミネルヴァ書房, pp.26-27.
- (3) 安田女子大学教職課程委員会編(2005)『中学校・高等学校教育実習の手引き』安田女

子大学

- (4) 篠田弘編(2002)『新訂資料で見る教育学』福村出版, pp.116-122.
- (5) 大淵憲一・石田雅人編(1994)『学習指導の心理学』ぎょうせい, pp.128-140.
- (6) 宇田川信一(2001)『子どもが壊れる!』廣済堂, pp.4-22.
- (7) 山脇由貴子(2007)『教室の悪魔』ポプラ社, pp.13-52.
- (8) 山邊光宏(2005)『教育の本質を求めて』東信堂, pp.71-93.
- (9) 岩内亮一・陣内靖彦編(1997)『新・教育と社会』学文社, pp.165-180.
- (10) 佐藤晴雄(2002)『教職概論』学陽書房, pp.100-112.
- (11) 仙波克也他編(2004)『現代教育学概論』コレール社, pp.195-210.
- (12) 教員養成研究会編(2001)『教育原理七訂版』学芸図書, pp.119-138.
- (13) 大庭茂美・赤星晋作編(2005)『学校教師の探究』学文社
- (14) 文部省(2000)『生徒指導資料第2集生徒指導の実践上の諸問題とその解明』大蔵省印刷局, pp.80-105.
- (15) 吉田辰雄・大森正編(1999)『教職入門－教師への道－』図書文化社
- (16) 上寺常和(2005)『新たに成長し続ける学校と教育』日本教育研究センター
- (17) 文部省(1969)『生徒指導研究資料第1集高等学校における生徒指導上の諸問題』大蔵省印刷局, pp.14-19.
- (18) 井上豊久・勝山吉章編(1996)『教育っていったい何だろう』福村出版
- (19) 折出健二(1993)『相互自立の生活指導学』勁草書房, pp.80-95.
- (20) 文部省(1973)『生徒指導研究資料第4集 高等学校における学業指導に関する諸問題』大蔵省印刷局, pp.1-21.
- (21) 平井誠也他編(1996)『教師のための教育実践心理学』ナカニシヤ出版, p.88.
- (22) 堂野佐俊他編(1999)『心理学からみた教育の世界』北大路書房, pp.187-212.
- (23) 河村正彦編(2003)『新しい教育の探究』川島書店, pp.70-75.
- (24) 北尾倫彦編(1996)『新しい評価観と学習評価』図書文化社
- (25) 宮崎猛他(2007)『新任教師のしごと』小学館
- (26) 小林利宣・倉田侃司編(2004)『生徒指導』ミネルヴァ書房, pp.35-40.
- (27) 笠間達男(1992)『クラス担任の生徒指導入門』学事出版
- (28) 木原孝博(1984)『現代生徒指導論』教育開発研究所
- (29) 松田文子・高橋超編(1997)『生きる力が育つ生徒指導』北大路書房 p.220.
- (30) 松田文子・高橋超編(2003)『生きる力が育つ生徒指導と進路指導』北大路書房
- (31) 文部省(1975)『生徒指導研究資料第6集生徒指導の推進体制に関する諸問題－高等学校編－』大蔵省印刷局, pp.15-27.
- (32) 江川玟成編(200)『生徒指導の理論と方法』学芸図書, pp.29-38.
- (33) 文部省(2000)『生徒の問題行動に関する基礎資料－中学校・高等学校編－』大蔵省印刷局
- (34) 倉田侃司・山崎英則編(1992)『教育の基礎』ミネルヴァ書房, p.3.
- (35) 今泉信人・南博文編(2000)『人生周期の中の青年心理学』北大路書房, pp.182-184.
- (36) 日本進路指導学会編(1996)『キャリア・カウンセリング』実務教育出版 pp.184-203.
- (37) 小泉博明他(2007)『小学校・中学校・高等学校対応教育実習まるわかり』小学館
- (38) 小松喬生・次山信男(2005)『教育実習を成功させよう』一ツ橋書店
- (39) 森秀夫(2005)『教職の意義と職務』学芸図書

- (40) 山崎秀則・西村正登編(2001)『求められる教師像と教員養成』ミネルヴァ書房
- (41) 杉尾宏(1986)『教育技術の構造』北大路書房
- (42) 岩波書店編集部編(1997)『教育をどうする』岩波書店, pp.36-37.
- (43) 大橋功(2000)『教師をめざす若者たち』プレジデント社
- (44) 八尾坂修(2008)『教員免許更新制度』明治図書出版
- (45) 日本教師教育学会編(2008)『日本の教師教育改革』学事出版, pp.196-209.